

幼児における音楽表現の「豊かさ」の検討

渡辺 ユリナ * 篠田 弘子 * 鈴木 裕子 **

* 愛知教育大学大学院幼児教育領域

** 幼児教育講座

How do Caregivers Gauge the Richness of Musical Expression by Young Children ?

Yurina WATANABE*, Hiroko SHIMADA* and Yuko SUZUKI**

*Graduate student, Aichi University of Education, Kariya 448-852, Japan

**Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要約

The word "richness", as used in the description of the goals of the "expression" area of the course of study for kindergarten has a wide range of meanings, leading to ambiguity regarding goals and evaluations for musical expression. For research and educational purposes, it is critically important to clarify the nature of the "richness" of music in children's lives and the "richness" of children's musical expression as judged by caregivers. Therefore, this study has attempted to make the concept of "richness" of musical expression by young children more concrete. The resulting concepts derived through coding were classified, and the categories, elements and concepts created were named. There were 66 elements as "Child's appearance and situation" which included the richness of the musical expression. Also, there were 22 concepts as "Value of caregivers" to its appearance and situation, and it was classified into 6 categories as "contents felt by caregivers". Based on this, quantitative age-related tendencies were found, and it was found that their structure differed depending on the child's age according to the subject. The concept of "richness" of musical expression in children, as investigated in this study, has the potential to contribute to establishing objective goals and evaluations that can be shared without the caregivers losing sight of children's "richness" of musical expression and to formulate childcare content.

Keywords: 音楽, 表現, 豊かさ, 幼児
music, expression, richness, young children

I 問題と目的

保育者が、子どものふれる「音」や、子どもの「表現」を読み取る際、何をもって、それらを「音楽的に豊か」であると見なすのかは、表現教育における目標と評価の設定に大きく影響する。

例えば、子ども達を取り巻く「音」といえば、楽器の音や歌などの楽音をはじめ、物と物のこすれる音や雨風の音、話し声など様々だが、近年、「音楽に関わる活動をしている時に発せられる音楽」だけでなく、以上のような「生活の中に見られる音楽」に着目した研究が多く見られる。幼児は絵を見たり物語を読んだ

り、身体を動かしたりする中で「音」とふれ合い、自分なりの想像や表現を楽しんでいる。しかし、幼児教育の現場における音楽活動の場面で多く見られるような姿は、一般的に音楽をしていると捉えられやすいのに対し、子どもたちの生活におけるふとした瞬間に生まれるような姿は、なかなか実態がつかめずに見落としてしまいやすい性質を持つ。したがって、保育者が、あらゆる音や姿を「音楽的」なものとして意識的に捉えない限り、保育における音環境づくりや子どもの発した音の受け止めに繋げることは困難と考える。

また、幼児の「表現」について、吉永¹⁾は、音楽表現を音楽の再表現活動と捉えることなく、幼児の素朴

な音への気づきや音の表出行為に注意を向けることが大切としている。その上で、平成元年の幼稚園教育要領改訂で領域「表現」が新設されたのは、既成の音楽の再表現のための技術指導に偏りがちな従来の音楽表現の活動から、保育者の意識を幼児の音にかかわる姿に向け、「表現」という視点から子どもと音楽との関係をとらえ直すことを促す意図を含んでいたためと述べている。また、表現は固定化よりも、音の多様性に向かって変化する傾向を持つ²⁾、幼児の表現の育ちは、目に見える技能や知識の習得を目的にして計画された活動ではなく、幼児の自発的な遊びが保育者によって支えられていく中で育まれていく³⁾、イメージがあつての、表現という行為が生じるというプロセスが、幼児の表現活動を考える上でも重要である⁴⁾とされるよう、表現の仕組みを説き、様々な形で現れる幼児特有の自由な表現を探る研究がされてきた。

幼児の音楽表現は、受け止め、読み取る立場によって解釈は多様になる。表現者の年齢や置かれた状況、表現の目的などによっても、知識・技能の程度や結果の形は変化する。そのため、保育現場で子どもの表現を読み取り、指導する際、保育者は何を大切にすればよいのかも多様になる。しかし、子どもの自由な表現を認めた上で、それを多角的な視点から捉え、子どもが更に音楽的表現の楽しさを感じられるための具体的かつ発展的な実践方法について長く示されなかつた⁵⁾ために、保育者はどのように指導し、評価をすれば良いのか模索状態にある。吉永⁶⁾も、教材も自由、内容も自由な教育のなかで音楽活動を模索し、その方向性が得られないことを要因の一つとし、そのために、場当たり的な流行の教材になってしまったり、指導法がマニュアル化されていてわかりやすい音楽訓練を導入してしまったりしていると指摘している。

このような実態から、研究分野では子どもの音楽的表現を捉える視点について具体化しようとする動きが加速し、現在は大城ら⁷⁾や古本ら⁸⁾をはじめとして、チェックリストを用いた評価方法の考案や、園内研修を通じた振り返りから子どもの音楽的表現を捉え直す研究⁹⁾などが注目されている。

幼児の豊かな表現を実現しようとする時、その表現を受け止める保育者は、適切な対応や言葉がけに気を配っているが、幼稚園教育要領、領域「表現」のねらいに示される、「豊か」という言葉の意味は多義にわたり、保育者の表現における目標を曖昧にしている。したがって、研究・教育を進める上で、生活の中に在る音楽の「豊かさ」や、保育者が捉える子どもの音楽的な表現の「豊かさ」の中身を明らかにすることの必要性は高いと考える。そこで本研究では、幼児の音楽表現に対して、保育者が「豊か」と感じられるのはどのような状況によってあるのかを調査分析し、「豊かさ」の具体化を図ることを目的とする。

II 研究方法

調査方法：「子どもがどんな表現をする時に音楽的に豊かだと思ったか」を問うエピソードの自由記述式の質問紙調査を実施した。

対象：A県内公立保育園50園、私立幼稚園10園に勤務する園長・主任以外で、担任を持った経験がある保育士350名と幼稚園教諭85名の計390名。

分析

(1) 収集された650事例に対して、音楽表現における豊かさを読み取り解釈した。逐語化された文中に、抽象化するラベルを貼ることを通して、何らかのパターンを見出すコード化を行い、それらを要素に分類し、さらに上位概念をつくる作業を繰り返す。保育者の音楽観や保育観の傾向を考察しながら、要素、概念、カテゴリーを命名する。読み取りは、筆者が3回行う。1度目の結果を見ずに2回目以降を実施し解釈が一致しない場合は、幼児教育、音楽を専門とする研究者との合議のうえ決定した。その後、その要素、概念、カテゴリーが事例に適応するかを再判定しながら、命名を洗練化させた。

(2) 保育者の捉える音楽表現の「豊かさ」の年齢的变化を、記述数をもとに、 χ^2 検定、チャート図、クラスター分析によって量的に検討した。

III 結果と考察

1. 音楽表現における豊かさの分類（表1）

音楽表現の豊かさが含まれる「子どもの姿・場面」が66個の＜要素＞として抽出された。さらに、その姿・場面に対しての「保育者の価値付け」を22個の『概念』とし、「保育者の感じた内容」を6個の【カテゴリー】に分類した。以下では、【カテゴリー】別に、それに含まれる概念、要素を、命名に至った解釈をもとに、幼児期の音楽表現の豊かさを述べる。

(1) 【カテゴリーA】

保育者は、【子どもの持つ音楽的な力に「関心」「驚き」がある】と感じている。

「音楽的な力」とは、『a音楽を判別したり操作したりする力』『b決まりや手本、教示通りに再現する力』を指す。それらの力が窺える「子どもの姿や場面」は12種類に分類された。＜音程や旋律を聴き分けることが出来る＞(13例) ＜表現方法を調節し、多様に変化させることが出来る＞(56例)などの姿・場面を『a音楽を判別したり操作したりする力』として価値付けている。また＜示された楽曲や奏法を、速く正確にそのまま再現することが出来る＞(46例) ＜保育者の教え無しに、子どもだけで正確にまたは面白い演奏や表現が出来る＞(26例) ＜本番までの制限期間内に早く正確に再現することが出来る＞(18例)

などの姿・場面を『b決まりや手本、教示通りに再現する力』として価値付けている。

(2) 【カテゴリB】

保育者は、【子どもの音楽に対する心の在りよう 「感動」「頼もしさ】を感じている。

「音楽に対する心の在りよう」とは、『c 音楽への能動的な心持』『d 音楽を楽しみ・味わう情感』『e 自由に無理なく音楽と接すること』を指す。それらの心の在りようが窺える「子どもの姿や場面」は17種類に分類された。〈特定の音に強い関心や思い入れをもっている〉(36例) 〈自ら音楽を求める〉(45例) などの姿・場面を『c 音楽への能動的な心持』として価値付け、〈音を聴いて楽しみ、味わっている〉(54例) などの姿・場面を『d 音楽を楽しみ・味わう情感』、〈自由に、感じたままに演奏したり表現したりする〉(35例) などの姿・場面を『e 自由に無理なく音楽と接すること』として価値付けている。

(3) 【カテゴリC】

保育者は、【子どもの音楽行為の際の思考に「賢さ」「良さ】を感じている。

「音楽行為の際の思考」とは、『f 音の作用の効果を期待して音楽を活用する思考』『g 音楽に関する目的を達成しようとする際の思考』『h 思いを馳せて音楽行為をする思考』『i 言葉や身体の動きによって音楽を名づける・意味付ける思考』を指す。それらの思考が窺える「子どもの姿や場面」は9種類に分類された。〈気分を盛り上げて自分の意欲を喚起させたり場の雰囲気をつくったりするために、楽曲や歌を用いる〉などの姿・場面を『f 音の作用の効果を期待して音楽を活用する思考』として価値付けている。また〈演奏や表現の方法を試行錯誤する〉(25例) などの姿・場面を『g 音楽に関する目的を達成しようとする際の思考』、〈歌詞などから得た印象に自分の心を重ねたり情景を思い浮かべたりしながら聴く、演奏する、歌う〉(4例) 姿・場面を『h 思いを馳せて音楽行為をする思考』、〈音・音楽を身体の動きで表す〉(71例) などの姿・場面を『i 言葉や身体の動きによって音楽を名づける・意味付ける思考』として価値付けている。

(4) 【カテゴリD】

保育者は、【子どもの音楽行為そのものや、それが見られる状況に「新鮮さ」「音楽ならではの面白さ】を感じている。

「音楽行為そのものや、それが見られる状況」とは、『j 音楽に関する知識の幅を自然と広げていくこと自体』『k 日常の中で自然と音楽に親しむこと自体』『l 偶然性のある音楽を発見または生み出すこと自体』『m 身体と音楽を融合させること自体』『n 言葉と音楽を融合させること自体』『o 音楽に対して独自的な関わりをすること自体』『p 多様な方法で音楽を奏で表現すること自体』を指す。それらの行為や状況が窺える

「子どもの姿や場面」は13種類に分類された。〈それまで気付くことのなかった音や、音の響きの違いと類似を発見する〉(56例) などの姿・場面を『j 音楽に関する知識の幅を自然と広げていくこと自体』として価値付けている。〈身の周りの物から発せられる音の存在に気付いて、自ら聴いたり発したりする〉(112例) などの姿・場面を『k 日常の中で自然と音楽に親しむこと自体』、〈偶然生まれた音楽を発見したり、偶然に生み出したりする〉(6例) 姿・場面を『l 偶然性のある音楽を発見または生み出すこと自体』、〈全身で音・音楽を取り込み、受け止める〉(45例) 姿・場面を『m 身体と音楽を融合させること自体』、〈音・音楽をオノマトペを用いて表す〉(21例) などの姿・場面を『n 言葉と音楽を融合させること自体』、〈自分なりの考え方や思いをもって他者と異なる演奏、表現をする〉(6例) 姿・場面を『o 音楽に対して独自的な関わりをすること自体』、〈人それぞれ多様な表現をする〉(13例) などの姿・場面を『p 多様な方法で音楽を奏で表現すること自体』として価値付けている。

(5) 【カテゴリE】

保育者は、【子どもの他者との関わりに「音楽の効果」「保育的な手ごたえ】を感じている。

「他者との関わり」とは、『q 音・音楽を介した行為やそれに対する感情の共有』『r 音・音楽やそれに関する情報の受け渡し』を指す。それらの関わりが窺える『子どもの姿や場面』は8種類に分類された。〈他児と共に周知の曲の合唱や合奏を楽しんだり共有したりする〉(106例) などの姿・場面を『q 音・音楽を介した行為やそれに対する感情の共有』として価値付け、〈人を介して周知の曲や音楽行為が伝播されていく〉(94例) などの姿・場面を『r 音・音楽やそれに関する情報の受け渡し』として価値付けている。

(6) 【カテゴリF】

保育者は、【子どもの変化・変容に「音楽の効果」「保育的な手ごたえ】を感じている。

「変化・変容」とは、『s 遊びへの還元や展開』『t 音楽への関心・求心が発端となった心情』『u 姿勢、技能の変化・変容や、音楽に対する心情、姿勢、技能の変化・変容』『v 音楽が発端となった子ども自身の変化・変容』を指す。それらの変化・変容が窺える「子どもの姿や場面」は7種類に分類された。〈音楽を介した他事との関わりを基に遊びが展開される〉(43例) 姿・場面を『s 遊びへの還元や展開』として価値付け、〈楽器の音に魅かれ、楽器演奏に興じるようになる〉(3例) などの姿・場面を『t 音楽への関心・求心が発端となった心情』、〈音楽に困難感をもつ子どもが、困難感を解消したり、上達したりする〉(13例) などの姿・場面を『u 音楽に対する心情、姿勢、技能の変化・変容』、〈普段の生活の中で困難感をもつ子どもが、音楽によって困難感を解消したり、上達

表1. 幼児における音楽表現の豊かさ

【カテゴリー】	【概念】	<要素> (事例数)	
A 子どものもつ音楽的な力に「感心」「驚き」がある	a・音楽を判別したり操作したりする力	1 音程や旋律を聞き分けることが出来る (13例)	
		2 表現方法を調節し、多様に変化させることが出来る (56例)	
		3 理論や意味をふまえて歌ったり演奏したりすることが出来る (7例)	
		4 2つ以上の音楽行為を同時にこなすことが出来る (6例)	
		5 年齢水準を上回る音楽の技能や素養をもっている (4例)	
		6 新しい楽曲を一人で創出することが出来る (4例)	
	b・決まりや手本、教示通りに再現する力	7 示された楽曲や奏法を、速く正確にそのまま再現することが出来る (46例)	
		8 音と動き (フリ) のセットを覚え、速く正確に再現することが出来る (10例)	
		9 保育者の教え無しに、子どもだけで正確にまたは面白い演奏や表現が出来る (26例)	
		10 動き (フリ) をなぞらえて再現することが出来る (6例)	
		11 本番までの制限期間内に速く正確に再現することが出来る (18例)	
		12 本番中、正確にパフォーマンスすることが出来る (10例)	
B 子どもの音楽に対する心の在りように「感動」「頼もしさ」を感じている	c・音楽への能動的な心持	13 音に関心を向けている (4例)	
	14 演奏に憧れを抱いている (8例)		
	15 特定の音に強い関心や思い入れをもっている (36例)		
	16 難しい楽曲の演奏に挑戦する (9例)		
	17 目標に向けて熱心に演奏の練習する (6例)		
	18 自ら音楽を求める (45例)		
	19 保育者の音楽行為を真似る (26例)		
	20 他者の音楽行為を真似る (12例)		
	21 自信をもって堂々とパフォーマンスする (20例)		
	22 新しい楽曲や表現を創出する (37例)		
	23 身の周りのものを楽器に見立てて演奏する (44例)		
	d・音楽を楽しみ・味わう情感	24 身体と音の共鳴の心地よさを味わっている (49例)	
C 子どもの音楽行為の際の思考に「賢さ」「良さ」を感じている	25 音を聞いて楽しみ、味わっている (54例)		
	26 歌うことを楽しみ、味わっている (13例)		
	27 音を発することを楽しみ、味わっている (25例)		
	28 自由に、感じたままに演奏をしたり表現したりする (35例)		
	29 抑制・操作されることなく (外力に影響されることなく) 自然に演奏したり表現したりする (24例)		
	f・音の作用の効果を期待して音楽を活用する思考	30 気分を盛り上げて自分の意欲を喚起させたり場の雰囲気をつくったりするために、楽曲や歌を用いる (15例)	
	g・音楽に関する目的を達成しようとするとする際の思考	31 感情 (気持ち) を伝えたり、指示をしたりするために、言葉の代わりとして楽曲や歌、音を用いる (8例)	
	h・思いを馳せて音楽行為をする思考	32 リズムを覚え叩きやすくするための工夫をする (5例)	
	33 演奏や表現の方法を試行錯誤する (25例)		
	i・言葉や身体の動きによって音楽を名づける・意味付ける思考	34 歌詞などから得た印象に自分の心を重ねたり情景を思い浮かべたりしながら聴く、演奏する、歌う (4例)	
	35 音・音楽を形容詞で言い表す (1例)		
	36 音・音楽を言語に変換する (7例)		
	37 音・音楽を具体物の名称で形付ける (13例)		
	38 音・音楽を身体の動きで表す (71例)		
D 子どもの音楽行為そのものや、それが見られる状況に「新鮮さ」「音楽ならではの面白さ」を感じている	j・音楽に関する知識の幅を自然と広げていくこと自体	39 それまで気付くことのなかった音や、音の響きの違いと類似を見発する (56例)	
	k・日常の中で自然と音楽に親しむこと自体	40 ふとした瞬間に口ずさむ (15例)	
	41 具体物や情景から連想された楽曲を口ずさむ (29例)		
	42 身の周りの物から発せられる音の存在に気付いて、自ら聴いたり発したりする (112例)		
	43 無音の音楽を感じたり頭の中で発したりする (3例)		
	l・偶然性のある音楽を発見、または生み出すこと自体	44 偶然生まれた音楽を発見したり、偶然に生み出したりする (6例)	
	m・身体と音楽を融合させること自体	45 全身で音・音楽を取り込み、受け止める (45例)	
	n・言葉と音楽を融合させること自体	46 音楽のリズムと言葉のリズムを一致させる (9例)	
	47 音楽により言葉をアレンジする (18例)		
	48 音・音楽をオノマトペを用いて表す (21例)		
	o・音楽に対して独自的な関わりをすること自体	49 自分なりの考え方や思いをもって他者と異なる演奏、表現をする (6例)	
	p・多様な方法で音楽を奏で表現すること自体	50 多様な方法で演奏したり表現したりする (14例)	
	51 人それぞれ多様な表現をする (13例)		
E 子どもの他者との関わりに「音楽の効果」「保育的な手ごたえ」を感じている	q・音・音楽を介した行為やそれにに対する感情の共有	52 共通の目標に向けて他児と共に歌や楽器演奏の練習をする (36例)	
	53 他児と共に周知の曲の合唱や合奏を楽しんだり共有したりする (106例)		
	54 クラス全員で周知の曲の合唱や合奏を楽しんだり共有したりする (24例)		
	55 保育者と共に周知の曲の合唱や合奏を楽しんだり共有したりする (9例)		
	r・音・音楽やそれに関する情報の受け渡し	56 気付きや知識、表現などを他児と共に・比較し合う (14例)	
	57 他者に向けて、意識して演奏したり表現したりする (4例)		
	58 保育者に向けて、意識して演奏したり表現したりする (6例)		
	59 人をして周知の曲や音楽行為が伝播されていく (94例)		
F 子どもの変化・変容に「音楽の効果」「保育的な手ごたえ」を感じている	s・遊びへの還元や展開	60 音楽を介した他児との関わりを基に遊びが展開される (43例)	
	t・音楽への関心・求心が端緒となつた心情、姿勢、技能の変化・変容	61 身近な素材から発せられた音に魅かれ、身近な素材を用いて音を楽しむようになる (6例)	
	62 楽器の音に魅かれ、楽器演奏に興じるようになる (3例)		
	63 楽曲の演奏に魅かれ、演奏に興じるようになる (4例)		
	64 上達した、褒められたことなどによる、調子の良さを喜ぶ気持ちをきっかけにさらに意欲が増す (4例)		
	u・音楽に対する心情、姿勢、技能の変化・変容	65 音楽に困難感をもつ子どもが、音楽によって困難感を解消したり、上達したりする (13例)	
	v・音楽が発端となった子ども自身の変化・変容	66 普段の生活の中で困難感をもつ子どもが、音楽によって困難感を解消したり、上達したりする (19例)	

したりする> (19例)などの姿・場面を『v 音楽が発端となった子ども自身の変化・変容』として価値付けている。

【カテゴリE】と、【カテゴリF】は、その場の子どもの姿を瞬間に捉える、その他のカテゴリと異なり、過去から現在、現在から未来へと繋がりを持つ子どもの姿を時間軸の中で見守る保育者特有の視点が見受けられる。

2. 音楽表現の豊かさの捉え方における年齢の傾向

(1) カテゴリー別に見た年齢的变化 (図1)

音楽表現の「豊かさ」について、1~6歳の年齢別に、【カテゴリ】記述数の割合を図示した(図1-1~図1-6)。

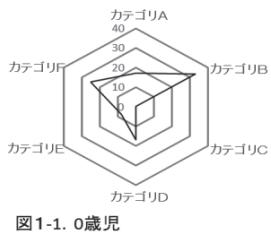


図1-1. 0歳児

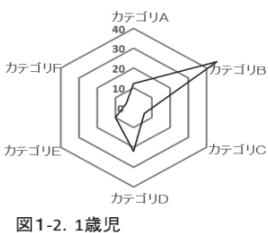


図1-2. 1歳児

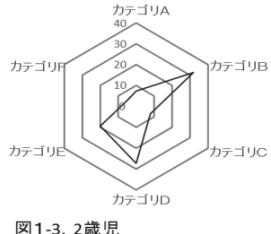


図1-3. 2歳児



図1-4. 3歳児

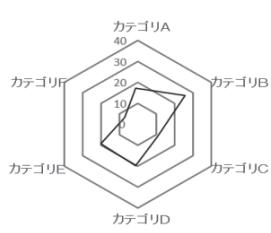


図1-5. 4歳児

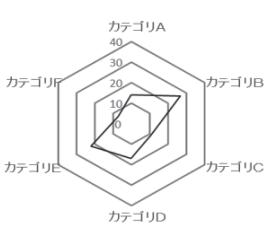


図1-6. 5歳児

図1. カテゴリーの頻出割合から見た年齢別傾向

全ての年齢において、【子どもの音楽に対する心の在りように「感動」「頼もしさ」などを感じている(カテゴリB)】と、【子どもの音楽行為そのものや、それが見られる状況に「新鮮さ」「音楽ならではの面白さ」を感じている(カテゴリD)】が占める割合は高い。また3歳児から5歳児にかけて、低年齢には見られない【子どものもつ音楽的な力に「感心」「驚き」がある(カテゴリA)】と、【子どもの他者とのかかわりに「音楽の効果」「保育的な手ごたえ」を感じている(カテゴリE)】が占める割合が高くなる。これらのことから、年齢が高くなるにつれて保育者の関心が音楽的な力や、他者との関わりなどに広がると考えられる。

また、0歳児以外のどの年齢においても、【子どもの変化・変容に「音楽の効果」「保育的な手ごたえ」を感じている(カテゴリF)】が占める割合は低いが、時間軸で捉えられる子どもの音楽表現は瞬間に目の前で捉えられる子どもの音楽表現よりも量的に少ないためと考えられる。

(2) カテゴリー、概念、要素における年齢との関連

各【カテゴリ】、【概念】、【要素】における年齢と記述数との関連を見るために χ^2 検定を行った。その結果、いずれも有意差が認められた。(カテゴリ : $\chi^2=59.74$, df=25, p<.05) (概念 : $\chi^2=158.36$, df=105, p<.05) (要素 : $\chi^2=480.26$, df=325, p<.05) その後、残差分析を行い、年齢による違いを分析した。

1) 【カテゴリA:子どものもつ音楽的な力に「感心」「驚き」がある】

2、3歳児では有意に少なく、5歳児では有意に多いことから、年齢が高くなるほど、保育者は子どもが音楽的な力を發揮している場面に対して感心や驚きを感じている。

2) 【カテゴリB:子どもの音楽に対する心の在りよう 「感動」「頼もしさ」などを感じている】

1歳児で有意に多いことから、1歳児では表に表れにくい豊かな心の動きがあること自体に保育者が感動や頼もしさを感じやすいと考えられる。また【カテゴリB】に属する『音楽を楽しみ・味わう情感(概念d)』が1、2歳児で有意に多く5歳児では少ないと、【保育者の音楽行為を真似る(要素19)】が0、1歳児で有意に多く4歳児では少ないと、年齢が高くなるにつれて保育者の関心が心情面以外に広がると考えられる。

3) 【カテゴリC:子どもの音楽行為の際の思考に「賢さ」「良さ」を感じている】

【カテゴリC】に属する『言葉や身体の動きによって音楽を名づける・意味付ける思考(概念i)』が、3歳児で有意に多い。3歳児は言葉や身体の発達に伴って、名付けたり意味付けたりする行為が顕在化し、それが音楽表現と結びついて保育者の目に留まりやすいためと考えられる。

4) 【カテゴリD:子どもの音楽行為そのものや、それが見られる状況に「新鮮さ」「音楽ならではの面白さ」を感じている】

2、3歳児では有意に多く、5歳児では有意に少ない。【カテゴリD】に属する『身体と音楽を融合させること自体(概念m)』について0歳児で有意に多いことから、0歳児はより原始的な身体と音楽の融合が多く発現し、それが保育者の目に留まりやすいと考えられる。また、『音楽に関する知識の幅を自然と広げていくこと自体(概念j)』が3歳児で有意に多い。『日常の中で自然と音楽に親しむこと自体(概念k)』が5歳児で有意に少ないと、5歳になると、様々な

音楽経験の中で培った知識や技術を活かし楽器などを使った意図性のある音楽を扱うようになるため、日常の中に溶け込んだ音楽に親しむ場面に比して保育者の目に留まりやすいのと考える。

5) 【カテゴリE：子どもの他者との関わりに「音楽の効果」「保育的な手ごたえ」を感じている】

【カテゴリE】に属する＜共通の目標に向けて他児と共に歌や楽器演奏の練習をする（要素52）＞が3歳児で有意に少なく5歳児で多いことから、5歳児は3歳児と比べて他者との関わりが盛んになる上に、他児と楽しむだけでなく教え合ったり高めたりすることが出来るようになると考えられる。保育者は音楽によって支えられる関わりを期待しているといえる。

6) 【カテゴリF：子どもの変化・変容に「音楽の効果」「保育的な手ごたえ」を感じている】

【カテゴリF】に属する『音楽への関心・求心が端緒となった心情、姿勢、技能の変化・変容（概念t）』、『音楽に対する心情、姿勢、技能の変化・変容（概念u）』が0歳児で有意に多いことから、子どもにとって変化・変容のきっかけとなるほど新鮮で心動かされる姿は、ふれるもの全てが新しい0歳児に多く見られ、それが保育者の目に留まりやすいと考えられる。加えて、本来は時間軸で捉えられる子どもの音楽表現は瞬間に目の前で捉えられる子どもの音楽表現よりも少ないが、心情や行為が読みとりにくい0歳児に関してはその逆の結果が表れたと考えられる。

(3) カテゴリー間の距離と年齢的傾向（図2）

カテゴリーが各年齢でどのような関係が認められるのかを見るためにクラスター分析を行った。図2-1～図2-6は、Ward法を使用したデンドログラムである。

0歳児は、【子どもの音楽に対する心の在りよう（カテゴリB）】が主なカテゴリーとして位置している。保育者の記述の例として、「男児：音楽が聴こえると泣いていたのがピタリと止まり、笑顔で手を叩く」事例や、「女児：音楽が流れる玩具のボタンを自分で押して、体を揺らしたり手を叩いたりして楽しむ」事例がある。このように、保育者は表情や動作などから、読み取りにくい0歳児の心の動きを窺おうとしていることが認められる。

1歳児には、【行為そのものやそれを伴う状況（カテゴリD）】が加わる。保育者の記述の例として、「1歳男児：落ち葉を踏み、音を楽しむ」事例や、「1歳女児：保育園で、新聞紙遊びをしている。床に落ちていたくしゃくしゃの新聞紙を拾い上げ、胸の前でシャカシャカと音を立てて叩いていた。面白い様子で音への興味が始まっている場面だった」事例が見られる。このように、1歳児になると子どもは具体的な行為をするようになるため、保育者は表情や動作のみならず子どもの行為からも心の動きを察することが出来るようになると考えられる。

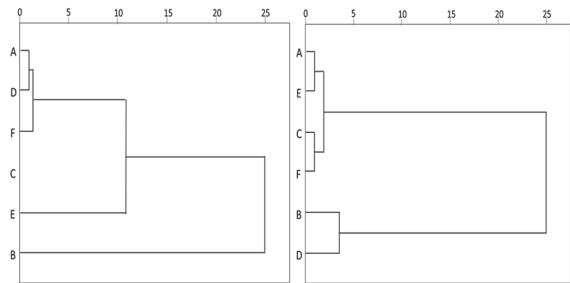


図2-1. 0歳児

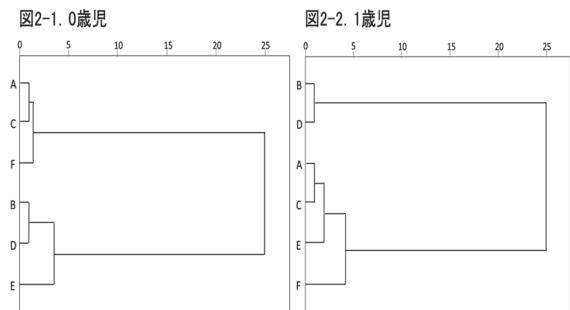


図2-2. 1歳児

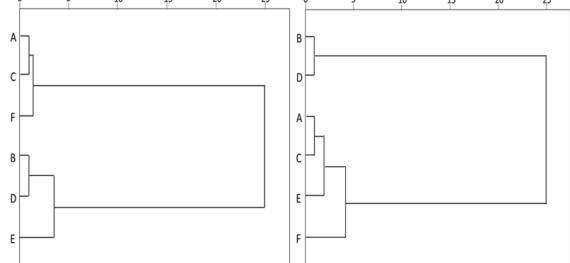


図2-3. 2歳児

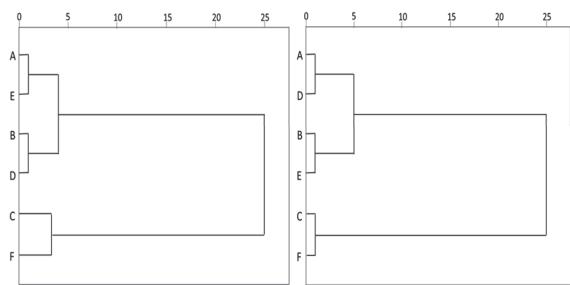


図2-4. 3歳児

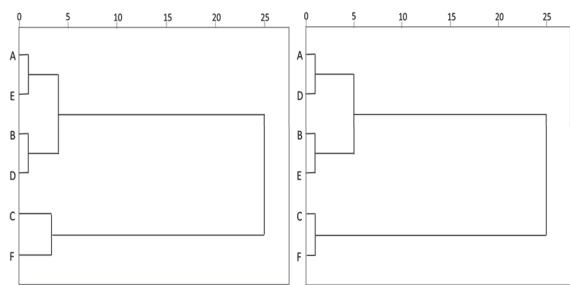


図2-5. 4歳児



図2-6. 5歳児

図2. カテゴリー間の距離から見た年齢的傾向

- A 子どものもつ音楽的な力に「感心」「驚き」がある
- B 子どもの音楽に対する心の在りよう 「感動」「懶もしさ」を感じている
- C 子どもの音楽行為の際の思考に「賢さ」「良さ」を感じている
- D 子どもの音楽行為そのものや、それが見られる状況に「新鮮さ」「音楽ならではの面白さ」を感じている
- E 子どもの他者との関わりに「音楽の効果」「保育的な手ごたえ」を感じている
- F 子どもの変化・変容に「音楽の効果」「保育的な手ごたえ」を感じている

2歳児には、【子どもの他者との関わり（カテゴリE）】が加わる。保育者の記述の例として、「手遊び、歌遊びをする中で保育士も子どもも一緒に笑顔を交わし合いながら歌い体を左右に揺さぶりながら楽しんでいた」事例や、「色々な物をたたき“ポンポン言ってる”“トントンだ!”と一つひとつの音を言葉にして保育士とのやりとりを楽しむ」事例がある。他者との関わりの中でも特に、保育者との関わりが顕著にみられる。

3歳児は、1、2歳児と同様に、【子どもの音楽に対する心の在りよう（カテゴリB）】と【行為そのものやそれを伴う状況（カテゴリD）】が主要クラスターとして見られるが、さらに、【子どもの持つ音楽的な力（カテゴリA）】と【子どもの音楽行為の際の思考（カ

テゴリC】と【子どもの他者との関わり（カテゴリE）】と【子どもの変化・変容（カテゴリF）】で構成されるクラスターが加わる。

保育者の記述の例として、「絵本を読む前の手遊びで、保育士を真似てリズム打ち遊びをする。毎日コツコツとしていると初めは“♪♪♪” リンゴ“♪.♪♪”など言葉とリズムを変えて全員ができるようになつた」事例や、「ピアノの音に合わせて様々な動物になりきる。“こうやって動くんだよ”と子どもたちで会話をしながら色々な動きがあり、テンポに合わせて早く動いたりゆっくり動いたりと自分たちで考える姿があった」事例が見られた。このことから、保育者はより多様な視点を持って、子どもの行為や心の動きを読み取るようになると考えられる。

4歳と5歳は共に、【子どもの音楽行為の際の思考（カテゴリC）と子どもの変化・変容（カテゴリF）】で構成されたクラスターが出現する。保育者の記述の例として、「4歳児：リズム打ちをする際“バナナ”→“○○○”など言葉に当てはめて行っていたところ、数名興味を持ち、友達同士で言葉を考えながらリズム打ちを楽しんでいた」事例や、「5歳男児：新しいことに消極的だったり、自信があまりない本児が、竹太鼓のリズム打ちをすぐに覚え、上手に打つ。褒めると自信になり、竹太鼓に積極的に取り組んでいた」事例が見られた。4歳と5歳のデンドグラムは類似した構造をしているが、4歳では特に【子どもの持つ音楽的な力（カテゴリA）】と【子どもの他者との関わり（カテゴリE）】が、5歳では特に【子どもの音楽に対する心の在りよう（カテゴリB）】と【子どもの他者との関わり（カテゴリE）】が近い距離にあることが認められた。

IV 総合考察

本研究では、幼児の音楽表現に対して保育者が「豊か」と感じられるのはどのような観点によってであるのかについて検討し、「豊かさ」の具体化を図った。

まず、音楽表現における豊かさの分類に関して、記述総数が50以上であった要素に、＜それまで気付くことのなかった音や、音の響きの違いと類似を発見する（要素39）＞と、＜音を聴いて楽しみ、味わっている（要素25）＞、＜表現方法を調節し、多様に変化させることが出来る（要素2）＞がある。

＜それまで気付くことのなかった音や、音の響きの違いと類似を発見する（要素39）＞において、様々な音を発見するのは子ども自身であり、そこには生活の流れの中で自然と音・音楽の世界を広げていく子どもたちを傍で見守る保育者の姿が浮かぶ。また、＜音を聴いて楽しみ、味わっている（要素25）＞の総記述数が多いが、横井¹⁰⁾が、子どもの音楽的表現の

捉え方に関する調査において、保育者が「子どもが表現を楽しんでいるか否か」といった視点に軸足を置いていることを明らかにしているように、本研究の結果からも、保育者の関心の多くが、子どもが音・音楽を楽しみ味わうことにあるといえる。以上のように、音・音楽を耳にして気づきを得たり、楽しみ味わったりするなど、音・音楽を発していない子どもの姿に関して吉永¹¹⁾は、音を発していないても、聴くこと自体が音楽の積極的な経験と述べ、大場¹²⁾は、表現という言葉には当てはまらない、実態が捉えられにくいものを「あらわし」として価値付けている。さらに、やる気がない、後ろ向きに思える行動や、何をしているのか分かりにくい行動なども子どもの一種の「あらわし」として大切に受け入れていくことの重要性を述べている。保育者は表面的には音楽を介した表現を行っていると捉えにくいものも、音楽的な表現として捉え、「豊かさ」を感じていることが認められた。一方、横井¹³⁾は、「音楽を楽しんでいる」という包括的で曖昧な言葉に依拠して子どもの音楽的表現を捉えることは、保育者が子どもの表現を「見守る」「受け止める」という援助方法に重きを置いていることと同義でもあるが、そのような方法が定着した背景には、保育者が子どもと音楽的にかかわる具体的な方法について長く明らかにされなかつたことが原因としてあり、それが指導方法に難しさを感じる保育者の悩みとして顕在化していると述べる。新山王¹⁴⁾は、「音楽を通じて学ぶべきものは、より多くの人々が聴いて心地よいと感じる音楽表現上の制約を使いこなすための技術や知識である。守らないといけないルールや制約があるからこそ、そこから外れる自由を理解することが出来る」とし、表現教育における技術や知識の重要性を論じている。＜表現方法を調節し、多様に変化させることが出来る（要素2）＞の記述数が多いことから、保育者は、音楽を楽しみ、味わうだけでなく子どもが意図をもって音楽を操作する力を持つことを豊かさの一つとして考えていることが認められた。

さらに、記述総数が100前後であった要素に＜身の周りの物から発せられる音の存在に気付いて、自ら聴いたり発したりする（要素42）＞と、＜他事と共に周知の曲の合唱や合奏を楽しんだり共有したりする（要素53）＞、＜人を介して周知の曲や音楽行為が伝播されていく（要素59）＞がある。

＜身の周りの物から発せられる音の存在に気付いて、自ら聴いたり発したりする（要素42）＞について、ここでいう「身の周りの物」とは、玩具や食べ物、雨風などを指す。吉永¹⁵⁾は、幼児の音環境を構成する音素材のなかでモノの音と人の声を調査の対象としているが、その理由を、幼児にとってそれらが生活や遊びのなかで触れあう最も身近な素材であるとともに、日本の幼児が、「雑音の中にも音の響きの複雑さを味

わい楽しむ」音の聴き方をしているのではないかと考えたからとしている。保育者は、楽器を用いたり歌ったりするような明らかな音楽行為のみならず、一見すると音楽とは無関係に思える、身の周りの物が発する音を音楽として捉え、子ども達が幅広い音楽に親しむことに「豊かさ」を感じていると考えられる。町田¹⁶⁾は、このような「音楽」と認識されずに行われている諸活動において、真の意味での「音楽」が発現しうることに気付くことの必要性を説いているが、音楽的表現に関する保育の方法以外にも、保育者自身の音楽性や音楽観が子どもの表現に影響を及ぼすことを知り¹⁷⁾、保育者自身の価値観を自覚する¹⁸⁾ことが重要と考える。〈他児と共に周知の曲の合唱や合奏を楽しんだり共有したりする（要素53）〉、〈人を介して周知の曲や音楽行為が伝播されていく（要素59）〉について、三輪¹⁹⁾は、「音楽を媒体とした養育者と幼児、また幼児期の子ども達が人間的な交わりの中で満ち足りた思いを抱くのは、音楽が人ととのコミュニケーションの中で強く関わっており、社会性の育成を促すと共に、感情の伝達、心から心へ思いを伝えるという音楽の持つ特性に深く関わっているからである」と述べている。保育者は、このような音楽の持つ特性を理解しており、子ども達の他者との関わりが音楽によって支えられ、また音楽が子ども達によって伝播されていくことに「豊かさ」を感じていると考えられる。

次に、「豊かさ」の概念を基にして、音楽表現の「豊かさ」の年齢的变化を、量的に分析した結果、保育者は子どもの「音楽に対する心の在りよう」と、子どもの「音楽行為そのものや、それが見られる状況」に、どの年齢の子どもにおいても共通した「豊かさ」を感じていることが明らかになった。何よりもまず子どもの心の在りように多大な関心を向ける保育者の保育観と、目の前で繰り広げられる子どもと音楽の密な交わりを読み取る際の保育者の多様な音楽観が垣間見える。

一方で、低年齢では保育者の関心が「心の動き」に向き、年齢が高くなるにつれて保育者の関心が「音楽的な力」や、「音楽行為に伴う思考」、「他者との関わり」など低年齢には見られない姿に広がることから、表現教育において、音楽の諸要素を認知でき、発達段階に応じて認知に基づく表現が可能な乳幼児期の子ども²⁰⁾に対して、保育者の感じる「豊かさ」も多様化、複数化すると考えられる。

音楽表現の豊かさの年齢的傾向に表れるものは、子どもの音楽表現の実際ではなく、子どもの音楽表現を読み取る保育者の視点と価値観である。本研究で、「豊かさ」の概念を明らかにするために抽出した66個の〈要素〉、22個の『概念』、6個の【カテゴリー】が、保育者が音楽表現の目標や評価を客観的に設定する際の基準となるよう、今後の課題として、保育現場への還元を目指したい。

引用文献

- 1) 吉永早苗（2012）幼児期における音感受教育－モノの音・人の声に対する感受の状況と指導法の検討－、白梅学園大学大学院子ども学研究科博士課程2012年度学位論文、14
- 2) 曽田裕司（2016）保育の「表現」領域における幼児の「変化する音楽表現」への着目、尚絅大学研究紀要人文・社会科学編、第48号、126
- 3) 乙部はるひ（2018）幼児の遊びにおける音楽的表現の展開、保育学研究、56（2）、75
- 4) 下田和男・西村政一（1990）幼児の音楽と表現、建帛社、1
- 5) 五十嵐睦美・高瀬慎二（2020）幼児の音楽的表現に対する保育者の捉え方の実態－保育者の経験年数と音楽理解度を手がかりにして－、桜花学園大学保育学部研究紀要、第21号、13
- 6) 前掲書1), 28-29
- 7) 大城典子・比嘉絵美・緒方茂樹（2012）子どもの音楽における発達と評価に関する研究－教育実践場面における活用をめざして－琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要、3、45-54
- 8) 古本奈奈代・児嶋輝美（2014）保育の改善につながるチェックリストの作成－音楽表現に関する保育の評価を用いての検討－、教育情報研究、30(2), 3-9
- 9) 芦田宏・門田理世・野口隆子・箕輪潤子・秋田喜代美・鈴木正敏・小田豊・淀川裕美（2012）日本版SICSを用いた園内研修の現状と課題－幼稚園と保育所への質問紙調査を通して－、兵庫県立大学環境人間学部研究報告、14、31-40
- 10) 横井志保（2016）保育者による子どもの音楽的表現の観方に関する研究－たたく表現活動についての保育者の自由記述から－、名古屋学院大学論集人文・自然科学篇、53（1）、43-48
- 11) 前掲書1), 5
- 12) 大場牧夫（1996）表現言論－幼児のあらわしと領域表現－、萌文書林、195
- 13) 横井志保（2011）領域「表現」に関する調査研究－音楽的表現における保育者の意識と実態について－、名古屋柳城短期大学研究紀要、33、125-129
- 14) 新山王政和・加藤幸子・吉松頼美・太田理恵・石川翼・井垣智恵（2013）表現と鑑賞を一体化させ音や音楽を聴く力の育成をめざした授業実践－2－音楽構成要素を知覚・分析させ表現へ結び付けさせた試み－、愛知教育大学教育創造開発機構紀要、第3号、87-96
- 15) 前掲書1), 233
- 16) 町田育弥（2018）“音楽”という生き方－「音楽表現指導法」を解体する試み－、上田女子短期大学児童文化研究所所報、40、85

- 17) 田崎教子 (2013) 「表現（音楽）」に対する保育者の保育観と音楽観－質的な質問紙調査をもとにして－, 東京福祉大学・大学院紀要, 4 (1), 43-54
- 18) 石川眞佐江 (2013) 幼稚園教育要領における音楽活動の位置付けの歴史的変遷－領域〈音楽リズム〉から領域〈表現〉への転換を中心に－, 静岡大学教育学部研究報告, 44, 97
- 19) 三輪宜彦 (2005) 音楽によるコミュニケーションの必要性 (1) –人間の成長過程の中で－, 県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要, (6) 12
- 20) 鍵渡有華 (2005) 乳幼児期における音楽の基礎的能力に関する研究－音楽の楽しさを重視した「遊び」を通して－ (1) 幼児の発達と音楽経験, III 音楽経験と認識) 日本学校音楽教育研究, 第9巻, 92

(2020年9月23日受理)